

九州大学百年史 第8巻 : 資料編 I

九州大学百年史編集委員会

<https://doi.org/10.15017/1448763>

出版情報 : 九州大学百年史. 8, 2014-05-30. Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

第三章 学徒動員・学徒出陣

第一節 研究動員・学徒勤労働員

三二六 科学研究ノ緊急整備方策要綱及ヒ学内科学動員委員会ニ関

スル意見

『科学研究動員関係書類』一九四三(昭和一八)年

科学研究ノ緊急整備方策要綱 一八・八・二〇
閣議決定

第一方針

科学技術ノ動員ニ関スル綜合的根本方策ノ一環トシテ大学其ノ他
科学研究機関ニ於ケル科学ニ関スル学理研究力ヲ戦争ノ現段階ニ
於テ最高度ニ集中發揮セシメ科学ノ飛躍的向上ヲ図リ戦力ノ急速
増強ニ資スル為ニ之ガ体制ヲ速力ニ整備ス

第二要領

- 一、大学其ノ他科学研究機関ニ於ケル科学研究ハ大東亞戦争ノ遂
行ヲ唯一絶対ノ目標トシテ強力ニ之ガ推進ヲ図ル
- 二、学術研究会議ヲ強化活用シ大学其ノ他科学研究機関ノ科学ニ
関スル学理研究力ヲ最高度ニ集中發揮セシム

- 三、大学其ノ他科学研究機関ニ於ケル直接戦力増強ニ資スル研究
ニ付テハ陸海軍其ノ他之ニ關係アル方面ノ要望ニ基ツキ之ニ協
力スルモノトシ之ト密接不可分ナル基礎的研究ニ関シテハ各種
研究機関独自ノ性格及ビ機能ヲ最高度ニ發揮セシム之ガタメ其
ノ担当スベキ研究機関及研究者ヲ計画的ニ動員ス
- 四、大学其ノ他科学研究機関ノ内容及組織ニ付テハ前各項ノ企図
ヲ遂行シ得ル如ク之ガ重点の整備拡充ヲ図ル
- 五、科学研究要員ノ確保並ニ科学研究ニ緊要ナル資材及研究費ノ
充實確保ヲ図ル

第三措置

- 一、学術研究会議ノ機構ヲ整備強化スルト共ニ之ニ科学研究動員
ニ関スル特別委員会ヲ設置シ並ニ大学其ノ他主要研究機関ニ
夫々之ト連絡アル科学研究動員ニ関スル委員会ヲ設置セシメ文
部省ニ於テハ両者ヲ活用シ学理研究力ノ集中發揮ニ当リ其ノ他
科学ノ飛躍的向上ニ必要ナル行政的措置ヲ行フ
 - 二、科学研究要員ノ確保ヲ図ル為左ノ方途ヲ講ズ
- 1、緊要研究ニ従事スベキ要員ニ付テハ専心研究ニ従事セシム

ル如ク軍ノ服務ニ関シ適當ナル措置ヲ講ズ

2、大学及専門学校ノ卒業生ニシテ緊要研究ニ従事スベキ者ニ付テハ優先ノ配当ヲ行フ

3、研究要員ノ急速ナル増加養成ヲ図ル為所要ノ大学及専門学校等ノ定員ノ増加其ノ他必要ナル措置ヲ講ズ

4、科学研究ニ専念セシムル為研究要員ノ待遇ニ付所要ノ改善ヲ考慮ス

三、科学研究用資材ニ付テハ科学研究ノ飛躍ノ向上ノ為所要ノ数量ヲ優先確保スルト共ニ之ガ重点ノ配分ヲ行フ等必要ナル措置ヲ講ズ

四、本要綱実施ニ要スル經費ニ付テハ速カニ必要ナル予算ノ措置ヲ講ズ

備考

一、措置ノ二ノ一、緊要研究ニ従事スベキ要員ノ軍服務ニ関シテハ関係序ニ於テ速カニ具体の方途ヲ考究ス

学内科学動員委員会ニ関スル意見

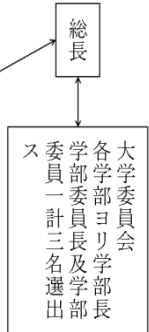
医学部

教授 下田光造 全 福田得志 全 皆見省吾

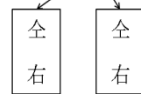
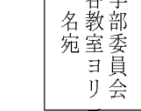
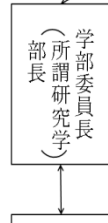
以上三名ヲ夫々委員ノコト

工学部

A



総長 (President)



備考 Aハ現時局下ニ於テハ理科系学部ト理科系研究所ヨリ選出ヲ

希望ス

Cハ研究問題ノ通達アル時Bノ意見ニヨリ新設スル 随ツテ問題解決ノ場合ハ解消スル又同時ニ二ツ以上存置セラ ル、コトモ連合スルコトモアリ得ル更ニ他学部ノソレト共力スルコトモ考ヘウル

農学部

学部長及研究所長 (官制上ノ) ヲ以テ委員ニ充ツ

理学部

目的

一、学術研究会内特別委員会トノ連絡

一、軍トノ直接連絡

一、学内ノ横ノ連絡

一、特殊ノ問題ニ対シテハ其統制下ニ夫々ノ研究委員会ヲ設置スル事

一、其他、科学動員上必要ナル事項

組織

総長、学部長、研究所長、

但必要ニ応ジテ夫々ノ専門家ヲ参加セシム

希望事項

一、学内ノ総智ヲ結集シテ問題ノ解決ヲハカルガ如クスルコト

一、時局下重要ナル研究ノ遂行ノタメニハ規則ニ拘泥スル事ナク

弾力性アル行政措置ヲ講ゼラレタシ 例ヘバ長期出張、講義

時間ノ配置ニ関シテ融通性ヲ認メラレタシ

一、既設ノ研究施設ノ利用ニ関シテハ有無相通ズルガ如ク総長ニ於テ取計ハレタシ

流研

流研ヨリハ所長及所員一名ノ参加ヲ希望ス

科学研究動員特別委員会ノ役割

一、軍其他トノ研究上ノ連繫

二、研究機関内研究会トノ連絡

三、大東亜戦争遂行上緊要ナル研究題目ノ選定

四、研究題目ヲ担当スル研究機関及研究者ノ選定

五、研究協力組織（総合研究、共同研究及連絡ニ関スル組織）ノ企画

六、研究費必要額ノ推算

七、研究成果ノ戦力ヘノ活用

八、研究上ノ各種幹旋援助

九、其他研究動員上必要ナル事項

大学内研究動員委員会ノ役割

一、科学研究動員特別委員会トノ連絡

二、軍其他トノ研究上ノ連繫

三、部内研究ノ重要研究題目ヘノ集中促進

四、部内研究・委託研究題目ノ研究協力組織ノ編成促進

五、研究ノ連絡指導其他資材資金等各種幹旋援助

六、地方高等専門学校研究者トノ協力

七、研究成果ノ戦力ヘノ活用

八、其他部内研究動員上必要ノ事項

三二七 九州帝国大学法文学部教授会意見書

〔第四五三回法文学部教授会議事録〕

一九四二(昭和一八)年一月一〇日

九州帝国大学法文学部教授会意見書

十月二十一日文部当局より内示せられたる事項に関し当日の協議の模様並びに翌二十二日の西部關係諸大学打合せの事情につき学部長より詳細なる報告ありたるによりて、本教授会は慎重熟議の上左の如き意見に到達せり。

精神文化科学の軽視せられざるべきことが綜合帝国大学に於ける文科系学部の存続並びに研究機関の現状確保の方針によつて明示せられたるは誠に正当の措置なるも、防空上の見地並びに授業上の關係による学生委託の件に関しては、根本的に考慮を要すべき点數なからず。

(一)九州帝国大学は我が国文化の發祥地に設立せられて以来、本学部を含む綜合大学として西部学区の文科的中心をなし、年と共にその重きを加へつつあり。現に本学部に教育を受くる者その概ねは九州、四国、中国の出身者にして、全国官立高等学校二十六校の中広島以西にあるもの、その三分の一を數ふ。人口疎開の見地よりするも文化の地方的中心を確立すること益々緊要となりつつある際、西日本に於いて本学部の教育を保全し真に文化の淵藪たる実を備ふるは当然なり。大東亜建設前進拠点として本学の意義愈々重きを加ふるの

時、内外地学生のみならず外国人留學生をも此地において教育を繼續するは最も適當の措置といふべきなり。

(二)苟くも学生の教育に責任を持つ立場に立つ大学がその學生を他大学に委託し晏如としてあることは、教育上許さるべき事柄に非ず。大学はそれぞれ特色ある學風を伝統として有し、殊に文科系の学科はその學風を離れては教育の全きを期し難し。本学部の學生は從來に於ても法文經三科の合計各学年三百數十名にして、教官(四十四講座)との接觸深く、文科のみならず、法經學生に対しても入学第二年以上の者には演習制度を必須科目として採用し、大學生たるの教育の徹底に努めつつあり。従つて本學學生の教育は研究機關を離れて成立し難き關係にあれば、之等學生を他大学に委託するが如きは、徒らに混亂を招くのみにして、教育の成果を挙げ得ざるは極めて明らかなり。

(三)今回の徵集により本學學生二千名の大部分が入宮すべきも、未丁年者及びその他の者(帰還學生、既検査未召集學生、女子學生、外人留學生)にして殘留する學生ほぼ二百數十名あり。これら學生中には応召待機中にして教官直接の嚮導に俟つに非ざれば教育の成果を期し難き事情にある者尠しとせず。又短期の在学期間を経て軍務に服せんとする學生に対しても講義と教練以外に研究室中心の俱學俱進的教育を併せ行ひ大學生たる教育の徹底を計ること正に緊要なりとす。さらに防空上の見地よりするも、空襲その他に対して本

学の諸施設を防衛するため、これが要員として寧ろ現在程度の残留学生は之を研究機関の下に教育訓練し職員と共に防護の任務に服せしむる必要あり。出勤学生に対しては十月十九日日本大学に於て舉行せられたる壯行会に於て予め帰還後に於ける授業の継続を確約しあり。今中途にして授業を停止し残留学生を他に委託するが如きは出勤学生に対し徒らに不安を醸成し後顧の憂を抱かしむるものにして、師弟の情真に忍び難きところなり。

(四) 学生の移転に関しては、学則上の相異により学生取扱ひに困難を生ずること多きを予想せらるるところなるが、殊に本学部は法文学部なる特殊構成を有するが故に一層この点に慎重なる考慮を払はざるを得ず。又本学部学生の大部分は九州地方及び近県に郷里を有し、家計其の他の事由により遠隔の地に遊学せしむるに於ては修学の継続困難なる事情にある者尠しとせず。この種学生の中には特に優秀なる者多く、人材養成の立場よりするも、本学に於て生活上の安定を与へつつ教育を継続する必要あり。

以上いづれの点より見るも、京都地方へ学生を移転する案の如きは適當と認め難く、西部に在りても特に九州に於ける唯一の最高教育機関たる本学部の為別段の御配慮を懇願せざるを得ざるところなり。

三二八 時局の要請に應へて報国隊はじめて学外に出勤

〔九州帝国大学新聞〕第二四三号

一九四一（昭和一六）年一月二〇日

時局の要請に應へて報国隊はじめて学外に出勤

過日の防空演習に予想以上の偉力を発揮した本学報国隊は、既報のごとく時局の要請に應へ始めての学外勤労作業を六日実施した。

この日、定刻七時二十分最高学年を除く約一千名の全学部学生はそれぞれ所定の場所に集合、朝靄をついて糟屋郡一帯の農村に一斉に繰出し、稲刈作業、脱穀作業などに従事した。

張り切つた学生の手でみる／＼うちに稲は刈取られ、束ねられる脱穀機を踏む足取りも軽く作業能率はぐん／＼上り、興亜学徒の面目を發揮した、かくて一日の尊い勤勞を終へて夕闇せまる五時、農民の感謝感激の声をあとに解散、帰路についた。

なほ、この日特技隊は学園で実戦さながらの猛訓練を行ひ、乗馬隊は午前九時工学部野田助教授に引率されて西部軍司令部に至り、清掃作業、乗馬訓練などに意義ある一日を終へ午後五時解散した。

〔註〕原本に句点追加。

第二節 学徒出陣

三二九 学生に動員

『九州帝国大学新聞』第二六八号

一九四三（昭和一八）年九月一三日

学生に動員

学内をあげて決戦に臨まん

法文系教育と一般徴集猶予停止

大東亜戦局を繞る昨今の諸情勢は日に日に深刻化し、現在の国内態勢を全面的にわたつて強化すべく過般來その具体的方策に関し慎重勘案中であつたが二十一日の定例閣議において決定を見るに至つたので廿二日午後七時三十分内閣情報局よりその内容を發表するとともに、東條首相は同時刻重要放送を行ひ国内態勢強化方策に対する政府の所信を披瀝し、一億国民の一大蹶起を促した、情報局發表の国内態勢強化策の中に二、として国民動員の徹底を計る項がある、一般の徴集猶予を停止し理工科系統の学生に対し入営延期の制を設く、理工科系統の学校の整備拡充をはかるとともに法文科系統の大学専門学校の統合整理を行ふ、普通教育のために必要な教員の確保をはかるとともにその採用に就ては広く適材を得るの措置を講ず文部省では二十一、二両日にわたつて省議を開催、慎重検討を進め

た結果これが実施方針の大綱を決定したので二十二日午後四時左の文部当局談を發表した

文部省当局談

昨日の閣議において国内態勢の強化方策の決定を見たのであるが、そのうち教育関係から重要な点は概略左の通りである

一、一般適齢に達した学生の徴集猶予はこれを停止し理工医および農科のいはゆる理工系統の学生については国の要員養成の建前から新たに入営延期の制を設け勉学を継続せしむること

一、理工医農などのいはゆる理工系統の学校はさらに整備拡充を行ふとともに法経文などの大学においては将来教員たるべきものなどのための教育を除きこれを停止すること

一、教員の確保は教育上極めて重要なことであるからこの教育は継続すること

一、惟ふに今回の措置は決戦下の今日ではあるが国の動員計画と睨み合せ国家の所要の要員を養成するといふ意図に基づくものである、したがつてこれまで学窓にをって勉学をつゞけてゐた学徒も今こそ勇躍奮起銃をとつて第一線に立つ時が來たのである、故に国家要請に基いて学窓に残り勉学をつゞけるものは正に国家に徵用せられたものといふべきであつて一層その勉学修養に精進努力することが第一の責務である

一、如上の処置により一部の教育は停止せられることとなるが、一

方には国土防衛の全きを期する上からも必要な程度においては
 学校校舎の整備疎開などの点をも考慮し今後適当な措置を講ぜね
 ばならぬと考へる、なほ学徒が服役より帰還したる場合における
 勉学については十分なる措置を講ずることとしたいと思ふ

一、なほ今回の措置によつて一部の教職員においては直接授業を担
 当することなきに至るものもあるわけであるが、これらは学問研
 究にあるひは他の学校の教育その他の要務にそれぞれ御奉公の道
 が存する次第であつて本省としては適當なる方途を講ずる考へで
 ある

同時に学校教育全般にわたつて決戦下に対処すべき行学一体の本
 義に徹し教育内容の徹底的刷新と能率化を計り国防訓練の強化、
 勤労働員の一層積極的且つ徹底的なる実施などをあはせ考へて行
 はねばならぬと思ふ、しかして学徒勤勞については学徒をして集
 团的に動員するやうに致したいと思ふ

一、要するに今回の決戦下の教育に関する臨時措置は戦ひ抜き勝ち
 抜くための非常措置であつて今夏職場勤勞に出勤して天晴れの実
 績を示した学徒諸子は今こそ『みたみわれ』の自覚に徹し思ふ存
 分第一線に勇戦奮闘、尽忠報国の誠を致すことができその若き力
 は皇軍に一層の威力を加へることゝなつたのであつてこのことは
 まことに諸子の本懐でありまた光荣これに過ぐるものはない、学
 校当事者、世の父兄各位はもとより広く一般国民各位におかれて

も如上の趣旨を十分に諒とせられてこの秋この際勇躍難に赴く若
 き学徒とともに深く内外の諸情勢を察し必勝信念のもと悠久なる
 皇国の将来と雄渾限りなき大東亜戦争の意義に徹し相携へて政府
 の意図の貫徹に協力邁進せられんことを望んでやまない次第であ
 る

法文科軽視は慎まねばならぬ

お召しのある迄勉強を

大東亜戦に勝ち抜くため国政の全面的合理化が断行されることにな
 つたが科学戦力の第一線を承る本学では右の施策に充分応へるべき
 態度をとることになつた、徴集猶予の制度が理工科学生は入営延期
 の特典のため実質的には影響が少い、だからこそ重点教育が必要で
 ある、法文科では本年は例年より五十名余も多数入学を見てゐるの
 で今回の諸施策の具体策には慎重を期せねばならぬ、本学としては
 お召のあるまでは落着いて学問研究に挺身する必勝の構へをとる考
 への由

荒川総長、菊池法文学部部長談によれば、法文科は国策に応じて新
 学年を期し大拡充を決定してゐる程で理工科専重のあまり法文科を
 軽視するやうなことがあつてはならぬ、又学生として学問研究の本
 分をつくすのが国家への御奉公であるから、学生はお召があれば一
 切の私生活を捨てて国難に赴く覚悟を定め、日本人として見苦しい
 精神的動揺などをおこさずそのときがくるまで落着いて勉強に専念

して欲しいと云つてゐる

尚ほ文部省専門教育局長より電報にて次の如き指示があつた

『文部省より何分の指示あるまで修練等は続行され教育に万全を期されたし、又十月の入学式は奉行されるやう』

三三〇 学生諸子に告ぐ

『九州帝国大学新聞』第二六九号

一九四三(昭和一八)年一〇月二日

学生諸子に告ぐ

総長 荒川文六

大東亜戦争が開始せられてから將に滿二年に垂んとして居る。顧みれば昭和十二年七月北蘆溝橋の附近に於て支那事変が勃発してから六年、更に遡つて昭和六年九月奉天の北方柳条溝に於て滿洲事變の端が発せられてから數へれば實に十二年の歲月が経過して居る。滿洲事變、支那事變、大東亜戦争と其の呼称は變つて来ては居るけれども、其の間に一脈の連繋がある事は申すまでもない処であつて、事態は当然進むべき処に進展し來つたのだと云ふ感じは、国民の誰でもが抱いて居る処だと思ふ。

世界に覇を制せんとする米英と八紘為宇の肇國の精神を以て共存共榮の樂を偕にする世界を實現せんとする我が國とは、其の主義に於て、其の思想に於て雲泥の差があり、水炭相容れないものがある。

是れが實に今次の戦争が始められた原因であるし、又之を徹底的に勝ち抜かなければならない所以でもあると申して差支ないであらう。敵米國の大統領は、米國は何の為に戦ふやとの質問に対して、或は真珠湾の奇襲に対する報復であるとか、或は世界の自由の擁護の爲であるとか、或は国民生活の保証の爲であるとか、種々の言を設けて之を説明しやうとして居るけれども、何れも皆世界制覇の爲であると云ふ眞の目的を擬装して居るに過ぎないのである。翻て我が宣戰の詔書を奉読するに、我が國が蹶然起つて矛を執るに至つたのは實に彼等の行ふ処が東亜安定に關する我が國多年の努力をして悉く水泡に帰せしめ、且つ我が國の存立をして危殆に瀕せしむるが爲であつて、眞に已むを得ないものがあるのである。宣戰の詔書に、『今や不幸ニシテ米英兩國ト鬪端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕力志ナラムヤ』と宣はせられて居るが洵に畏き極みである。

大東亜戦争は開始以來、御稜威の下、我が忠勇なる將兵の努力によつて着々として戦果を挙げ、又東亜共榮圈の建設も亦漸を遂ふて確實なる進展を続けつゝあるのであるが、世界の情勢は未だ樂觀を許すべき状態に立ち到つては居らず、戦局も亦日に日に苛烈の度を加へ來つて居る。而して敵米英は其の擁する莫大なる物的資源を動かして一挙に我を圧迫崩壊しやうと必死の反抗を試みて居るのであるが、我々は今や我々の全力を挙げて彼等の企圖を破砕し、彼等を屈服せしめ、以て此の戦争に最後の勝利を得なければならぬ所謂

決戦の段階に達して居るのである。我が国が東亜永遠の平和を確立して以て我が帝国の光栄を全ふせんとする途は外にはなく、唯此の戦争に勝つ事である。今は実に『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ』との勅語を実行する時が来たのである。

此の如き重大なる時期に於て茲に新しい学年が開始せられたのであるが、既に公表せられた通り政府は在学の事由による徴集延期の制度の停止を断行して理工科系の学生に対して入営延期が認められる外、総ての学生生徒は学業を中絶して国防の第一線に立つ事としたのである。是れは全く現在の如き状態に於ては戦争完遂の為に已むを得ない必要な措置なのである。学生諸子の大部分は近く臨時検査を受けて、それぞれ召に応ずる事となるであらうが、出でて軍務に服する者も、残つて学業に勤しむ者も、皆等しく大命を押し召を受けた者であると云ふ事を心に留め、一身を捧げて公に奉ずるの責を挙げられる様祈るのである。

元来諸子が本学において学業を修むる目的は、平時においても決して一身一家の爲ではなく、国家のために役立つ有用の人材たらんがためであることは申すまでもない処であるが、現今の如き非常の時においては、これが一層明かにせられる訳である。即ち征く者は剣を執つて敵を撃滅する為に一命を棄つるの覚悟を以て征途に上ると共に、止る者は其の知能技術を磨いて、之を以て敵の勢力を打破する為に身命を擲つて其の全力を尽さなければならぬのであつて

其の心構へに於ては、征く者も止る者と少しも異なる処があつてはならないのである。

元より学業を修めて之れによつて君国のために尽さうと志した諸子であるから、学徒として勉学にいそしみ、其の途に於て報国の誠を致すことを努めるのが本来ではあるけれども、一旦大命が降つて君国のために尽す他の途が諸子の前に開けた場合には、欣然起つて其の道に進んで御奉公をなすのが日本国民として当然のことではなければならない。否、寧ろ現下の如き我が祖国の危急存亡の秋において国家の要請に応じ、それぞれの立場において御奉公を為す事を得るのは日本国民として洵に本懐の至りであり、又光榮であると申さなければならぬのである。私は茲に衷心より諸子の武運および文運の長久を祈り、諸子が何れの途に行くにせよ、又如何なる任務が諸子に与へられるにせよ、誠心誠意、飽くまでも九州帝国大学学生たるの矜持と名譽とを傷くる事なく行動せられん事を希望して止まないものである。

三三一 送別の言葉

『九州帝国大学新聞』第二六九号

一九四三（昭和一八）年一月二〇日

送別の言葉

九州帝国大学法文会長 菊池勇夫

大東亜戦争はまさに決戦の段階に入り、わが九州帝国大学法文学部につどふ一千の学生もごぞつて出陣する日が来たのである。今や召しに応じて祖国の難に赴く学生諸君は、服務を光榮とし真にかへりみなくて出立つ軍人精神の伝統を切実に感じてゐることと思ふ。

学生諸君の出征に際し、大学生としての入隊であることにつき私は次の二つの点に注意を喚起したいと考へる。第一に学問精神は諸君の服務の中に生かさねばならないと云ふことである。『人生れて学に在らずと云ふことなし』と述べた山鹿素行は、学問において『学文』よりも『好問察邇言』を以て重要とした。すなはち『圃のことは老圃、農のことは老農に尋ぬることくいたさば皆学問となるべし』と説いてゐる。又学習の意義について『習の字は行にかかる。学べることも行にあらはし考へざれば皆口耳の学と云ひて実の学問にあらざるなり』と述べているのである。このやうな意味での学問精神は、軍隊教育を受ける場合だけではなく、駐屯する各地の文化や民情を察するについても、さらに戦場における生死の間にも発揚されねばならないものであると思ふ。

第二に学生諸君が前線に在つて勇戦奮闘することは、祖国と共に母校の学園を守護するものであると云ふことである。諸君のすべてが学園を去つた後においても、研究室を中心とする研究調査は諸君の出征により激励を受けて続けられるのであり、学灯を高くかかげて諸君の再来を待つことになるのである。そして母校における教育

の停止によつて閉ざされた門を開く鍵は、実に諸君が堂々と勝ちどきを挙げて凱旋する日のその歴戦の手中に握られてゐるのである。

新学年の開始に当り諸君が差し迫つた短期間を学修生活に集中して静かに落着くことを希望したのであつたが、われわれの期待以上のたくましい意志を以て学業に又修練に精進せられたのを見て、まことにたのしいと思ふ。そこにはかの千万の敵も言挙げせずにとりてきぬべき大丈夫の気概をも感ぜられるのである。今後各種の服務において諸君の忠誠を確信すると共に、ひたすら勇健にして武運長久ならん事を祈るものである。

願れば私が本紙の創刊号を手にしたのは在外研究員としてパリに滞留中のことであつた。ここに法文会新聞部の事業としては終刊となるべき紙上に執筆するについては感慨殊に深いものがある。わが学部は開学以来正に廿周年を迎へ法文会も亦十八年を経たのであるが、その間本紙は創刊以来十七ヶ年常に大学新聞としての役割を果して来たのであつて、歴代の新聞部員の努力には衷心より敬意を表するものである。

筆の重きこと錐の如く意を尽し難いが、以て出征の行を壮んにし併せて本紙の永き休刊を惜しむ言葉とする。(昭和十八年十月十五日稿)